方向　第三一号　一九八四年七月二五日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（一四）

赤谷明海

〈昭和二〇年七月二十九日の項につづく。なお、第三〇号五頁一〇行（七、二七）は（七、二九）と訂正〉

○衛兵任務　衛兵ハ週番士官ノ指揮ヲ受ケ部隊直接ノ警戒ニ任ズ

○B25西北方七〇粁

○［防諜ト謀略］

○果樹園集積所衛兵歩哨特別守則　一、此ノ歩哨ハ果樹園集積所衛兵歩哨　二、昼間ハ立哨シ夜間ハ絶エズ定メラレタル区域内ヲ動哨シ出入者ノ監視、付近ノ警戒ニ任ズルト共ニ火災盗難ヲ予防ス　三、特ニ警戒スベキ方面ハ大道路及東湖方面トシ、夜間ハ華人ノ通行ヲ禁ズ　四、特ニ構内使用苦力及付近農民ノ行動ヲ警視ス　五、異常ヲ発見セバ臨機ノ処置ヲナシ司令ニ急報ス　六、敵襲ニ際シテハ現場ヲ死守ス

○　通知方被依頼〈依頼せらる。「先に帰れば家へ通知を頼む」の謂か〉

・布施市北蛇草二二六　川本栄作方　誠一

・大阪府泉北郡美木多村大字上　（実父）山口幸一郎方　池田勝二

〈以上が別の場所に記録されたもの。次から元にかへる。〉

○八月二日貨物廠勤務を命ぜられて江夏部隊を出で一行五十名程の内半数は何処かへ行き、残りの中から更に十名は武昌単独宿舎の近くの衛生材料課〈二十一号倉庫〉勤務となり、その残り十五名が武漢大学下の衛生材料課〈二十二号倉庫〉へ回された。〈自分はこの十五名の中〉十名の中に山川、山本等知つた者が多く、別々になつたのは淋しかったが、此方へ来た者とて大して古い兵もゐず、甚だ気楽。作業班と云ふ名で材料の掩蓋壕〈防空壕〉等の構築作業に従ふのだが、作業隊の外に警備隊数名ゐる位で極めて小人数。内務もやかましくなく、給養の点も良好で、此の分なれば相当体重も回復する事と想はれる。十五名中、自分が最も体力劣り、苦力さへ笑つてゐる。自身では気がつかないが、大分痩せてゐるらしい。（八、三）〈このあとのことは十六日に記している〉

○八月十五日、単独の軍装〈徒手帯剣〉で本部前に整列し、天皇陛下の放送の録音を聞いた。遂に我国は米英ソ重慶の四ケ国に停戦〈降伏〉を申入れ、四ケ国の回答要求〈ポツダム宣言〉を御前会議の上受諾した。それ以外の事はまだ何も判らない。勝目のない戦争を何時までも続け、徒に国土と人民を消耗する事の愚は避けるがよい。尚、日・ソ間の衝突のうはさは一週間程以前に耳にした。〈この日私は本部医務室らしいところから出かけて詔勅を聞いたように思う。そう悲痛な空気ではなかった気がする。〉

○〈八月〉五日の日曜日は休養日で五人程外出した。自分は居残りの方だつたが、急に衛生材料を東湖まで運ぶことになり、午前中の事だつたが、満載したトラックの上に監視の為乗つてゐたところ、凹地に車輪が落ちた反動で、荷物と一緒に放り出され、臀部をしたたかにぶちつけて、一時は息もとまるかと思はれた。このため六日も七日も班内監視として静養させてくれたが、痛みはなかなかとれず、どんな関係か下痢をさへもよほし、食欲

は全然なく、身体が全般的に故障を起して来た。それどころか、十日の夕方、三種混合の予防注射を受けてすぐ作業にかかつたところ、作業場が冷い壕の中であつた関係か急に寒気がし、がたがたふるひ〈え〉出した。それでも日夕点呼に出、一晩すぎたら楽になつたので、注射の所為だらう位に考へ、十一日の朝二十一号倉庫に転入する者五名を募つたので、山川や山本等知つた者の多い所へ行きたくて希望した。午前中に着いて午後は早速作業。この日は熱発しなかつたが、食欲がない為、作業終る頃は疲労の極に達し、歩く事も苦しければ座つてゐることもつらかつた。翌朝〈十二日〉少し元気だつたが、四時頃から寒気熱発、上等兵殿に云つて注射を受けたところ夜遅くまで高熱にうなされた。その後今日〈十六日〉まで四日間、夕方になると先づ寒気がし、発汗し、高熱が出て来る次第。それでもここは二十二号倉庫と違つてとても忙しく、やかましい上等兵が二人もゐて、食事する限り作業せよと云ふから、休養する事が出来ない。（八、一六）〈マラリアの症状である。これを読むと終戦の日は本部に居ないことになる。記憶での本部医務室に誤りないと思うのだが〉

○命令が出た。典範類は皆焼却せよと。

○八月十七日、八名の者は二十二号倉庫へ転ずる様命ぜられ、そこより更に果樹園分哨に勤務を命ぜられた。此頃相かはらず熱発続き疲労甚し。前勤者の原部隊の連中〈原少尉ひきいる警備隊〉二十名程と合して歩哨に立つ。〈前記果樹園特別守則はこの時のものらしい。〉

○夜中熱発する事止まず、遂に二十一日武昌〈貨物廠〉支廠本部の医務室に受診。病名決定しかねて其処の警備隊宿舎に止り、〈終戦の日の記憶はこの時と混同か〉検温を続く。夕食時三六、二熱発時（二十四時頃）四二、○

起床時三八、五昼食時三六、八。二十二日の昼過に至り、引卒の古兵来つて「お前らは転勤になつたからすぐかへれ」との事に、そのまま戻つたところ、我々には転勤の事なし。其の後自ら〈硫規〉〈硫酸キニーネ。マラリアの特効薬〉を服用して二三日を経たところ、熱発は遂に止む。

○〈八月〉二十四日、原部隊退いて鏡部隊将校以下二十数名来る。形勢重大なるが如し。銃の御紋章〈菊の御紋〉を消す様指令来る。人々の往来の中にありて、絶えず自分は就寝。小便少量、四肢、顔、腹部皆膨れ、立上るさへ呼吸はげしくて苦しく、食欲は更になし。いつそ入院と思ひつつ、遠隔の地にあつて受診が思ふにまかせず、遂に今日に至る。幾分か良くなつてゆく模様。（八、二七）

○二十七日昼食後、望月班長の口添へで、此処では養生出来ないから二十一号へ帰つて診断を受けへよ〉との事に、池田、川本と三名二十一号へ戻つたところ、員数外にされてしまつたのか、三十一号へ行けと云ふ。重い身体をひきずりながら、やつと、三十一号に落着く。〈望月班長は警備、作業とは無関係。二十二号倉庫か果樹園の施設付下士官。氏から受けた温情は忘れることができない。（『平安学園と私』一四六頁参照）〉

○長い間の望みだつた「瓜を鱈腹食ひたい」と云ふのが時期既に遅く、やつと小さい、子供の頭足らず位の西瓜を見つけ、〈買うには買ったが〉買つたのが、何と六千円。棚ざらしのぶよぶよものへ栓のおかしな〉のサイダー一本四千円也。（八、二八）〈計一万円は持参の包帯で支弁。〉

○八月二十九日、支廠本部医務室にて受診。血沈。次の診断日には入院準備をして来よとの事。蓋し、血沈の結果によつて入院か否か決る也。

○三十一日再び支廠本部にて受診。このまましばらく休養すれば治るだらうといふ軍医殿の言葉。事実昨日あたりから食欲も出、幾分か身体も楽になつて来た。然し世局〈敗戦〉下の事、考へるところあつて、軍医殿の躊躇する心に此方から決定する様に仕向け、遂に入院と決つた。武漢大学の分院に入つたものの、その日半日待たされて診断なく、今日一日又診断なく、診断なければ食事区分が判らず、区分が判らなければ普通の飯は食はせられないとの事で、稀汁に等しい五分粥ばかり食はされ、空腹な事。この空腹は実に何月振りかで、有難くもあるがやりきれない。それにこの病院は一日二食である。腹の中は全く空になつてしまつた。（九、一）〈考へるところとは、内地への輸送は病人からであらうといふこと。ところが事実はその逆となつたようだ。といつて輸送に耐える身体であつたかどうか。〉

○九月七日、漢口の一陸〈第一陸軍病院〉へ転送になつた。入院さへすればすぐ内地還送になる様な事を云つてゐたが、船がなくて、先に後送になつた者が皆南京、上海辺で待たされてゐるとか。従つて後送を予期してゐた我々も、只転送になつただけ〈のこと〉で、当分の間かへれないらしい。武昌にゐた間の一週間は全く空腹の連続で、食ふ事ばかりを考へてゐた。与へられる食事の量は少い上に、分[illegible]する上等兵〈敗戦になつても階級制は厳存〉あたりが無茶をするので尚更少い。此方へ来て、今日までは三食与へられるのと、熱発して食欲が幾分衰へたのとで、左程食ふ事を思はなくなつた。今此方は患者が超満員。江漢病室だけで一千名の患者がゐると云ふ。（九、一〇）

○毎日空腹でたまらない。こんなに食ふ事ばかりにかまけてゐたのではと、自ら叱りもするがどうにもならない。

漢口二陸の二分へ第二分院〉にゐたときには、お菜の不味いのをこぼして、こんなに給養の悪い病院もあるまいと思つてゐたが、今はお菜どころの話ではない。三食なのは武昌の分院より有難いが、朝はおぢやへ雑炊〉が掛盗へ飯盗の内ぶた〉に三分の一、昼は蚕豆へそらまめ〉飯が飯盗に四分の一、夜はうどんが蓋盗に辛じて一杯。これで使役に出されるのだからやりきれたものではない。班内では中井上等兵へ大阪府の人〉と親しく、班長殿のうけもよく、飯分配も他人より幾分か多く、時として中井上等兵が軍服班から貰つて来てくれる食事を戴く事があつて尚空腹でたまらないのだから、他の者は推して知るべしである。四十名の班員に二十五名麦缶へ二十五名用の食缶〉の八分目位のものが与へられる。患者の大部分が脚気等の栄養不良者で、最も食餌を必要とする者ばかりなのに、これでは回復も覚束ない。（九、一七）へ使役は墓穴掘り。毎日二十名分の大穴を掘った。〉

〇十五日には国軍へ民国軍〉の凱センへ旋〉式が漢口、武昌で行はれ、百一発の礼砲が打たれた。ここ郊外の病室にゐても、市民の歓呼の声、爆竹の音が聞え、やがて付近に駐屯する国民軍の動きも見られる様になつた。未だ敗戦国民と云ふ悲惨さが実感となつては来ないが、内地へ帰れば相当予想外の情況にぶつかる事だらう。新聞は毎日見る事が出来る。杉山へ元〉、東条へ英機〉大将等自刃する者も多く、国内には自由主義的な色彩のものがどんどん頭を擡へもた〉げて来てゐるらしい。それに朝鮮の独立。今はじめて知る。重慶に朝鮮の臨時政府の存在してゐた事を。

〇毎日待つものは後送のよいニュースであるが、時たま何時頃後送あるらしい等の嬉しい話が出ても、さつぱり実現せず、一つの話が現はれてはすぐに杜絶え、待つ身にとつてじれつたい事此の上なし。（九、一八）

夜来庵かぜだより

―若い日の森田曠平―（一　三）

〈一九三七（昭和十二）年〉

七月八日　京都―下関間、消印。墨絵はがき。

紀の海は〈北原〉白秋で　山陰は〈釈〉超空だ　松の色が非常に美しい　海はにぶい明灰色だ。人は素朴　山にはねむの花が咲いてゐる　浦富にて

『水甕』八月号詠草。

洛北雲ケ畑

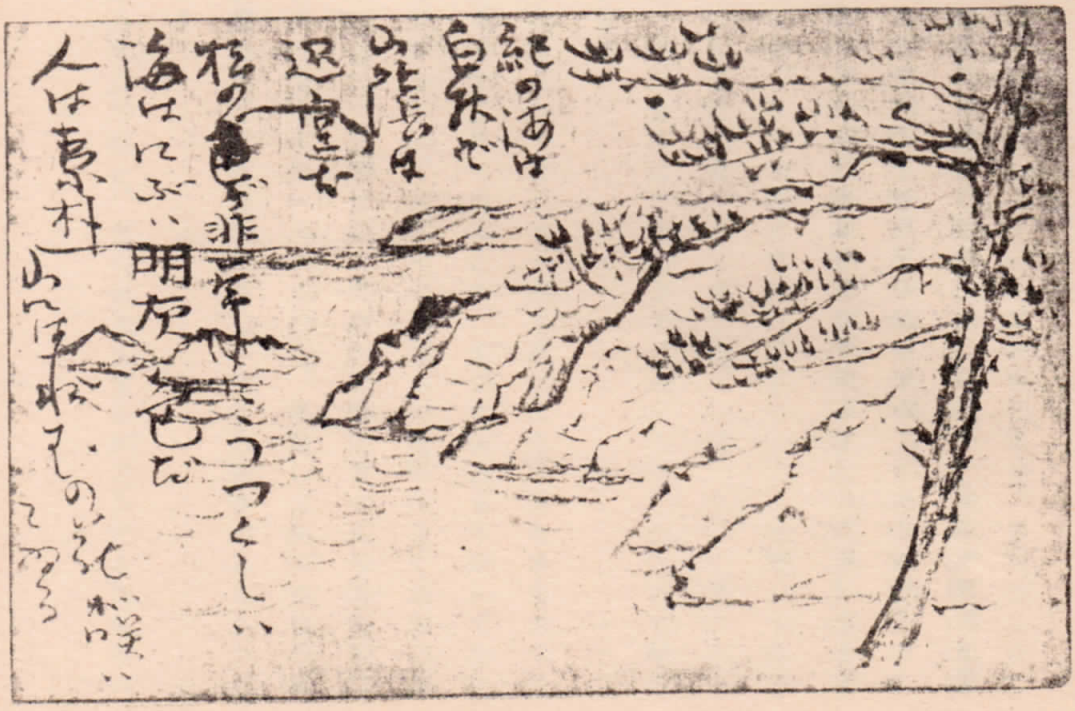
山峡に土の乏しき村ながら田にはゆたかに水はれる見ゆ

河鹿なく谷に来にけり水際に楓の枝は風にゆれつつ

あまごを食ふ

しらじらと雫小石の清らかさここにあまごも生れいでにけり

雲ケ畑より貴船へ



苔むせる嶺の老木の枝のはりたぎつ早瀬を敲ひてくらし
ゆくりなく木を曳き下す若者と会へば親しき言葉かはすも
行き行きて吾疲れたりすかんぽののびたる茎を親しみて見き
忽ちに来てすぎ去りし村時雨々々の雲は峰を越えしか

山深き所森林多し

つつましき心になりてゐたるかも杉の谷間に身をひそめつつ
山杉のさびしき峰にさやさやと今や暮れなん風いでにけり
風渡る向うの山の木々の鳴りわびしき音はここに聞ゆる
草もえの峰をいくつも越えて吹く風の渡りのただに疾きかも

貴船の夕暮

家々に夕げの烟たつ見つつ貴船の峡に下りけるかも
峰々をめぐりて鳴ける夕鳥の声はこもるも谷の狭霧に

八月七日　付、午後消印。手紙。山梨県南巨摩郡身延町東谷信行道場内原田憲雄あて。〈この年、日蓮宗第一回信行道場が八月一日から九月四日まで開かれ、原田は父の命により七月下旬から身延に行っていた。〉手紙みた。君の気持充分了解出来る故に又同情もする。現在の僕に出来るのは以上の二つだけ。僕が千万言を費して慰めても君の苦しみは解けないだらうから。

君は君自身の道を発見出来ると信ずる。山の清浄な風光がそれに役立てばこの上もない。雲上に安禅して毒竜を制するために常に苦しんでくれ給へ。それが君の鍛錬道だ。

水甕まだ見ないさうだね。君の作品はいいではないか。特選ではないが十一首出てゐる。十四首出してそれだけ採られてゐたら相当な成績だ。僕のは十五出てゐるけれど面白くない。勿論特選なんて思ひも及ばぬ。

あれから僕は一首も出来ぬと言つてよい。駄作は五つほど出来たのだが皆捨てる筈のものだ。あれからとは君に原稿を見せてからのこと。今度松林を描かうと思つて昨日から光悦寺へ写生に行つたり、それ迄は大掃除で四日も怠けたし、暑さに体も弱つたしとても頑張ることが出来ない。

謡曲湯谷に次の様な一聯がある。「花前に蝶舞ふ紛々たる雪、柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の来ること疾し、鐘は寒雲を隔てて声の至ること遅し。云云」といふ名文だが、これは出所の分らぬものだ。白秋のアカシヤの金と赤とが云々の詩も或は右の文からヒントを得たものではないかと思ふ様になつたのでちよつと書いてみた。

先日二回ほど久高先生御宅へ遊びに行つた。二階へ上つて蔵書を見せてもらつたが、万葉集全二〇巻だけには涎が流れた。その他随分いい本がある。長年苦心して蒐輯せられただけあつていいものが多い。恐らく君も同様に浦山しかつたらう。

丁度十二時になつた。午后から竜安寺へ写生にゆく。これで失礼する。　七日　曠平　枯魚君

埴土の痩原草生ゆきかへり友恋ふ山羊を曳きてぞまどふ　甲斐水棹　〈水甕同人〉

『水甕』九月号詠草。

浦富の海

松風の声もと絶えしひと時はま下に波のよる音聞ゆ
天津日の海の底ひにさし入るやしづきて見ゆる岩のこどしさ
海近き山のくぼみのこの村は家おしあひて磯の香す
夜釣舟今いでんとす飯櫃（ひつ）もちて漁師の妻は磯に下りぬ

三朝温泉

身はぬれてつめたけれども雨くだつ三朝の峡に一人来にけり

大山

暁の風はつめたし藁屋根の軒より落つる露しとどなり
鶯はぶなの木蔭に鳴きつぎぬ夜のあけそめて声のさやけさ
雲の動き速かにしてまな下に夜見が浜びは見えそめにけり
雨の後の山の湯ぶねは濁りたりにごれるままに浸るひそけく
山のこは乙女さびして語りつつ朝けはあつき茶をすすめけり
ぶなの木を霧の流らふひそけさに再びみんと人は言ひしか
聞きとめてきけばかそけし山原の裾ひく末にほととぎす鳴く

車窓風景

雨にぬれて前に起き伏す砂山に旅の心は定まりにけり

雨やみて海のたたへの色ふかし水平線はあかりそめつつ

『水甕』十月号詠草。

隠岐の島

島険へ陰？〉にしづもりをりし朝霧のややに動きて日は晴れんとす

ねむの花の咲きしづもれる磯山や海の遠音の折々きこゆ

波よする遠松原に立つけぶりやがては消えて暮れ入らんとす

眼交の雲の晴間を再びは見ざらん山にしばし向ひぬ

老松の深き梢に鴉らは音をのみ鳴きて枝うつるなり。

大文字

如意ケ嶽にもえてゆく火ゆ立ちなびへ原漢字〉く白き烟のありありと見ゆ

〈十月十七日（日）の原田の日記に「昨日森田とこで見たワトーのデッサンが忘れられない」と記す。二十二日（金）にも「森田を訪うた」と記し、モジリアニやキスリングの名も見えるから、それらの画集を見せてもらったのであろう〉

『水甕』十一月号詠草。

海近き村にて

白みゆく空ながめつつ朝床に近き潮の音をすがしむ
秋たちて浦吹く風の涼しさよ一夜ねぶりて腹冷えにけり
床ぬちにわが吸ふ息の冷えびえし今朝見る空の色のさやけさ
朝あけて間もなき海の市場には売買ふ人の声あわただし
ふりそそぐ秋の光に子供らは着物まとはず疑へるなし
昼ふかし浜に上げたる舟かげゆ魚（さかな）を下げて女（ひと）あらはれぬ
段（きだ）なして一途によする磯波の今満ちけらし月の下びに

淀の蓮池

蓮沼（はちすぬ）の秋日の中に鷺の群ましろき羽根の光さびしき
蓮葉の陰に下りてさびしきか鷺あひよりて首をひそめぬ
秋だちて濁れる沼のひそけさに下れる鷺は歩みうつすも
白鷺があひあつまりて昼ふかし沼の汀に秋日くもりぬ
遠くより見れば下りし鷺の群はちす青葉の中にましろき
茜さす秋日の下にしろじろと鷺は美羽（うづは）をひろげけるかも

〈十二月号は保存してなかったのか欠詠だったのかはっきりせぬが、詠草が見えない〉

はがき連句・狭庭（続）

山本のぶを
高橋達明
原田樸斎

早乙女らしき笠田螺とる　樸

名オ　春の雲畔に堰かれて動かざる　の

春の薄い白い雲が田の面に写りまったく動こうとしない。いかにものんびりとした田園の景色です。トントンと物語風に進み出した句が、拙句で腰を折った様な形になりました。どうもこの頃は心の働きが鈍く、すんなりと句が浮かんで来ません。　二月二十三日　の

これはなかなかおもしろい、雲が早乙女に恋しているのでしょう。江州老蘇の詩人井上多喜三郎の　洗い場の／戎い流れに／つけてある皿／その皿を数えながらゆく／秋の雲でした　を思い出し、

老蘇の杜を洩れるカラオケ　達

祭の余興ですが、歌枕の神域を守る老人たちに少しは気兼ねしている風があります。名残表はもっと波を立てないといけないのかどうか。よくわかりませんが、そうなら、ケンカの種はいくらでもあるようなので、よろしく。

二月二十七日　達

異国となりし祖国を捨ててさまよへば　樸

名残の折立にふさわしく山本さんの句は美しい。そして高橋さんの付けは新旧の対照、実に妙です。先日、ソ連の政治家が死んだとき、モスクワではショパンの音楽を一日中流している、とニュースが伝えるので、ショパ

ンがもし聞いたらどんなに怒るだろうかと思いました。老蘇の杜のカラオケには、ハンガリーに暮くナチの歌とかすかに通じる趣きが感ぜられ、バルトークを亡命させることにしました。　二月二十八日　櫟

乞食（こつじき）僧が胆も清らに　の

バルトークの頭を剃るのは忍びない気はしますが、秋刀魚の歌が思い起こされ、その中の「異土の乞食（かたい）：：」の句を引っ張り出しました。もっとも僕にとっては「祖国」という言葉は身に付かず、むしろ「故郷」という言葉に魅かれます。まだ見ぬハハノクニへの憬れが僕の望郷であるかも知れません。時にホゥオーの声に呑み込まれ、気付いた時には長い長い時が過ぎ去ったような気がすることもあります。フルサトハトホキニアリテオモフモノソシテカナシクウタフモノ　三月二日　の

南天や一人を恨む路地の暮　達

南天が冬に入ります。僧に供養するも亡き人のためと云ひ条、なお恨みのつのる暮のさびしさをいかんせん。恋含み（含みどころか？）であります。　三月五日　達

バルトークの剃髪とは奇想天外ですが、案外よく似合うかもしれません。南天もまたしおらしく、これは「恋含み」というより恋そのもの。で、いっそ冬の恋にと、こんなことにしましたが、いかが。高橋さんによれば、マラルメの「白鳥」のソネは、飛翔願望と飛翔拒否との葛藤、その葛藤の否定、否定の否定を契機として、完結し、あるいは完結しないのだそうですが、この「恋」はどうなることやら。

湖凍りつつ浮寝鳥閉づ　櫟　三月六日

にほやかに描きとめたる土師の筆　の

幻想的な句の後に少しは気のきいたものをと思いましたが、又もや現実的なものになってしまいました。土師は厳密な意味ではなく、陶工というぐらいの気持で使いました。　三月九日　の

サッシのはまる谷の湯治場　達

これはバードウォッチングの速出で、郡びた温泉がいいぜと辿りついた宿に対する絶望を品よい徳利に救われたという次第で、遣句とはこういう句をいうものと思います。　三月十一日　達

ナポレオン法典などを論議して　櫟

冷たい恋が、土師の筆でにおやかに受けとめ転ぜられたのは実にありがたいことです。バードウォッチングという高雅な遊びで湯宿にとまりあわせた三人の一人がスタンダリャンなどと称する俗物で、ふたりが地酒をなめて渡り鳥の品さだめする中へ割りこんで下らぬ法典論議：：といったところ。顧りみてジクジたるものあり。三月十四日　櫟

残の柿の朱し夕焼　の

論争もいいけれど、落ち残った柿の実を一人静かに眺めているのもなかなかいいものです。ナポレオンは後世に名を遺しましたが、いつか何処かで僕が見た柿の実など、誰一人憶えているものなどいますまい。もっとも柿にそれだけの力がある訳もなし、見る人のその時の心的状態に問題がある訳でしょうけれど。二十四日　の

声ひそめ子規売り渡す月の庭　達

あれこれ作ったあげく、子規を売りとばすことにしました。根が道楽息子なのでしょう。では、大金をよろしくお使い下さい。　三月二十六日　達

相撲に負けし小結の母　櫟

女手ひとつに育てられ、努力精進、小結までいったのはいいが、今場所いい相撲をとりながら白星につながらず、しょんぼり帰ってくる息子いとしく、せめて好きな酒でも膳につけてやろうかと思案している母、といったところですが、なんだかこじつけみたいですな。〈表には出ぬものの、ここが酒なら湯治場の酒とぶつかります〉な。執筆〉いよいよ名残の裏にはいります。前回同様ここで回しかたをかえます。よろしく。三月二十八日　櫟

慾深き村のいたこに栗分けて　達

もう雪のつもりはじめた津軽の寒村の話です。子を思う母の心の仇桜、さて、どうなりますか。二十八日　達

親の心子知らずで、目を盗んでは負博奕に凝っているというところで、

思はず唸る五一三六（ぐいちさぶろく）　の

終りも真近だというのに随分時間をかけてしまいました。　四月三日　の

老眼を近眼鏡にかけかへる　櫟

津軽の雪が北海道の春に寒さを分けているらしく、京都まで冷たい日々です。でも、庭の白木蓮はふくらみ、今日あたり二つ三つ開きそう。バクチに五一三六という術語があるのははじめて知りました。老眼鏡を近眼にかけかえ国語大辞典とやらを覚付なく繰っている、といったところ。　四月七日　櫟

二の腕になほ黒き骸骨　　達

老いたりとはいえ、かつて七つの海を馳せた水夫は博奕に、歌仙になお意欲満々というところか。名残裏に骸骨はあまりゾッとしないように思いますが、花で釣合を取ってもらえば幸いです。　四月十日　達

とつおいつ吹かれて寒し花の志賀　　の

人生振り返れば思い惑うことばかり。この寒い春に山桜の花も咲くには咲いたものの、風に吹かれためらうように散っている。この歌仙、僕の句もとつおいつ思い悩んだ末の駄句の山、という思いであります。十五日　の

緑の峰に萌ゆる北窓　　櫟

山本さん、お風邪はいかが。高橋さん、大学が始まりましたね。お二人とも忙しい時期にお付合い頂き恐縮でした。駄句ながら、これでうちあげ、ということにさせていただきます。有難うございました。四月十八日　櫟

※第三〇号一五頁一五行「雄詰」は「雄誥へをたけび〉」の誤りでした（執筆）

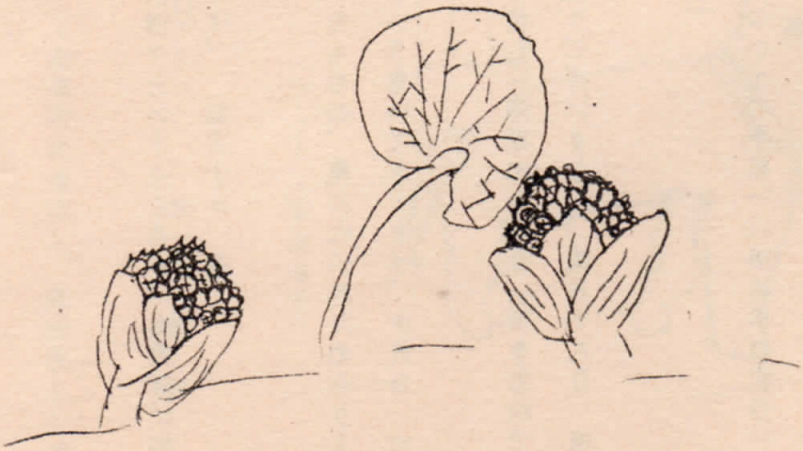
※『ルソー全集』第十二巻（一九八三年十二月・白水社）に収める「植物学についての手紙」「植物学の記号」「植物用語辞典のための断片」「植物学断片」は高橋達明氏の訳。氏はまた本年四月、八坂書房から『バラの画家・ルドゥテとその時代』（C・レジェ）の翻訳を出されました。同人原田禹雄は一九八三年九月、南島社から歌集『沈床花壇』を、今年二月、同社から歌集『天使館消光』を出し、原田憲雄が森田曠平氏の詩画集『女人春秋ー中国閨秀詩篇ー』（一九八四年・美術出版社）の翻訳にたずさわっています。

二月の庭

－1984 2 21－

原田 慶

コツンと ふきのとうが出た
みんな ちがう顔をしているから 庭をはいまわって
数えてみた
ポツンと ひとつ 出ているのもある
ぐるっと輪になっているのもある
ふくふくとふとっているのもあれば
ひきのばしたように細いのもある
「いろいろ 事情が ありまして。」
と 言いわけでもしたそうだが
ズズズ ザアアア と 屋根の雪が ずり落ちる
おどろいた めじろが
枇杷の枝を けって飛ぶ
ひよ鳥は くるみの木をゆすって トランポリンをしている
楠で かくれんぼをしているのは しじゅうから

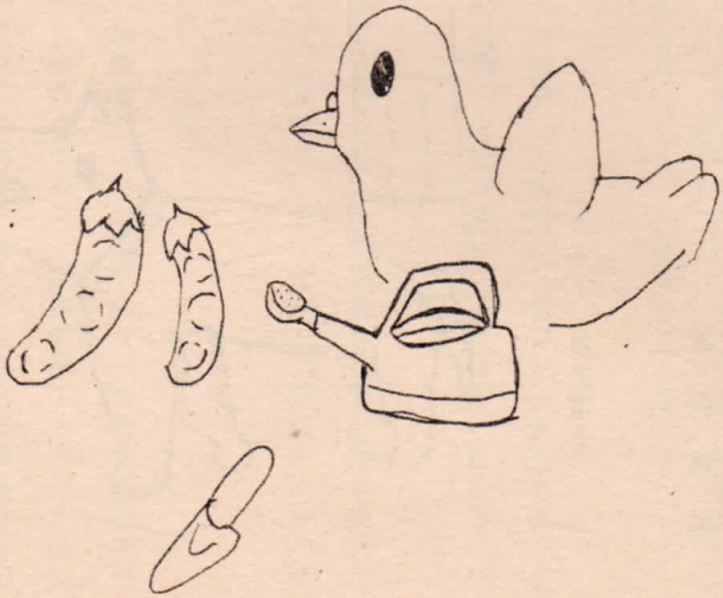


腰をかがめて　歩いていたら　突然　鳩にぶつかりそうになった
ドキン　としたのに　鳩は　飛びもしないで
いっしょに　歩く
　“馬鹿にしている”　とこころで
ふんがいしながら　知らんふりを　した

さやえんどうの芽が　出た
サラダ菜の種を　まいた

「また　明日から　寒くなります。」……気象庁

鳥が　みじかく　鳴いて　せわしげに　飛んで　行く
まだこんなに　明るいのに　もう　四時だ
テレビを　見るのを　忘れて　いた
3時20分“風変りなは虫類”
うりは虫・やつぼしつつは虫・あおばねさるは虫・

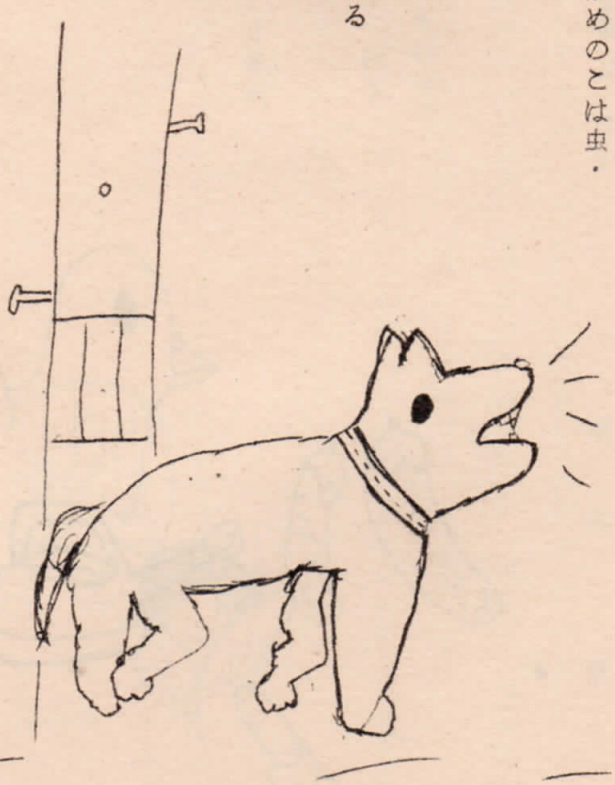


よもぎは虫・ほたるは虫・じんがさは虫・かめのこは虫・
きすじのみは虫

アンテナが　竹トンボのように　空に伸びる
建て物が高くなって　窓の視界が　せまくなる

犬が　遠くで　吠えている
　ワッ　ワッ　ワッ　　ワッ　ワッ

そういえば　ずいぶんまえから
吠えて　いたようだ



（カット　原田道子）

詞　論　5　―李清照（一三）―　原田憲雄

蘇軾（そしょく）は、とほうもなく大きな人だ。散文、詩・詞、書、そのいずれにおいても最高度に達成し、思想家として、

官僚として、一流だった。かれについての研究は山ほどあり、伝記もずいぶん書かれた。林語堂の大冊の伝記は日本語に訳された。それらを読んで、いろいろ教えられるが、遠慮なくいえば、かれの宇宙の大きさを充分に描ききるところまではいっていない。かれを批評すると、その批評によっておのれの限界を描いてしまう。

そういうおそろしさは、かれとつきあう誰もが知っているから、まともにかれを批評しようとはしないのかもしれぬ。蘇氏が六十六歳で死んだ一一〇一年、李清照は十八歳で結婚する。「詞論」を書いたのがいつかわからぬ。論中に見える人では賀鑄（方回）が一一二五年、もっともおくれて死ぬ。「詞論」はその後に書いたのだろうとの説もあるが、彼女がそのような世間的配慮に神経質であったとは考えにくい。むしろ結婚前後の十代後期、せいぜい二十五、六歳ごろまでの作ではなかろうか。ともあれ、前回に引いたような蘇氏らの詞に対する批評をしているのは壮烈というべきだろうか。あるいは恐ろしさを知らぬ若さというべきだろうか。

蘇氏は、三十六歳から三十九歳にかけての三年間、杭州に勤務した。そこですでに隠居していた張先を知り、詞を手がけるようになったらしい。教えられたところに留まっている凡庸な弟子ではない。張氏もまた、おそるべく頼もしき後進として敬重したのであろう。蘇氏はたちまち「詞」の境涯を突破し、詞を駆使しておのれの境涯を自由自在に表現しはじめる。「徐州郊外の石潭に雨乞いの礼参にいった道中」という序のついた五首の第四首。「浣溪沙」には違いないが、いままでに読んだ同調の詞とは全くの別世界。

さらさらと頭巾にこぼれるナツメの花／村の北でも南でも響く糸車／柳の木蔭でマクワウリ売る爺さま／／酒につかれ路ながくただもう眠たい／日は高くのどがかわく茶がのみたい／門を叩いて頼もうかこの百姓家

「虞美人」は杭州太守転任の送別宴での即興作。その旨の序がついている。

湖も山もほんとに東南の美景／一望千里です／太守どのでも幾たびやってこられるか／しばらくぶらぶらなさったら酔って倒れる処まで　／／沙河のつつみにともし火がつきました。「水調」の唄だれがうたっているのだろう／夜ふけて風静まり帰ろうとしたときに／ただひとつ江上の月の碧琉璃

人は新しいものに目を引かれ、かわったものに心を奪われる。詩しか知らなかった中国の文人には詞の新調はめずらしく、恋愛をうたう術を知らなかった彼らは忽ち、この嫋嫋にほれこんだ。しかし、詞はつづれ織りや浮世絵版画のように手のこんだ作業の上になりたち、作業を成功させるためには心が限りなく繊細巧緻でなければならず、その世界は濃密だ。酒につかれた者が茶をほしがるように、詞につかれた文人たちは、蘇氏のさし出すものによみがえるような気がしたのだろう。「赤壁懐古」の副題をもつ「念奴嬌」は、蜀漢の丞相諸葛孔明と呉の将軍周公瑾の連合軍が魏の曹操の大軍を赤壁にむかえ撃ち大破させた『三国志』の事件をうたう。

大江は東に去り／洗ひ尽す／千古風流の人物を／故塁の西べ／人はいふ「三国の周どのの赤壁」と／乱るる岩は雲と崩れ／とどろく濤は岸をひき裂き／捲起こる千堆の雪／江山は画のごとく／かの時いかほどの豪傑ぞゐし／／はるかに想ふ公瑾時に／小喬をめとりしばかり／雄姿英発／羽扇とり頭巾つけ／談笑しつつ／敵の船灰と飛び煙と消えぬ／ふるき国に魂遊べども／情多しと笑ふなるべしわが／早やも白髪生ひしを／人の世は夢の如し／一つきの酒をそそがむ江上の月

豪快放胆、じつに驚くべきものである。蘇氏の弟子の陳師道は、しかし「退之は散文の手法で詩を作り、先生

は詩の手法で詞を作る。天下の巧みを極めたものではあるが、要するに本色ではない」といった。この批評には反対者が少くない。蘇氏があるとき詞を作って弟子の晁補之と張耒に見せ、やはり弟子ながら詞のうまい秦観の作品とくらべてどうだ、と聞いたところ「秦観の詩は詞みたいで、先生の詞は詩みたいです」と口をそろえていった。まずこちらが定論で、李清照の批評もそれを技術論に具体的に進めたに過ぎないともいえよう。

「赤壁懐古」のような詞風を学ぶ人に南宋の辛棄疾があり、清朝になって常州派とよばれる人たちがあり、わが国の森槐南もまたその一人。ひっくるめて「豪放派」とよばれる。作品さえよければ、豪放であろうが纖細であろうがよいわけだが、蘇氏の詞が、詩とあまりかわらぬことは確かで、詞というジャンルの特色がぼやけてしまううらみは消しがたい。李清照自身、詩は詩としてすぐれた作品をもつから、そこのところを衝いたのだ。

もっとも蘇氏だって豪放いってんばりではない。拙稿（一）に引いた「洞仙歌」は本色中の本色といっていい。やる気になれば何でもできる。そういう大きさがかれの特色だ。李清照が指摘する声音については、蘇氏は詩においても他の詩人とは違ったところがあり、かれは故郷四川の音、あるいは当時の日常会話に使う音を、作詩にもちこんでいたのだろう、といった論文を、ある言語学者が書いていた。今の文学観からすれば革新的なものとしてたたえられようが、当時の詩学からすれば耳ざわりなものだったに違いない。「つなぐ」といえばよいことばを、どこの方言かしらないが、東京に住む物書きたちが「つなげる」と言い出して、言葉にうるさいはずの詩人や小説家まで疑うことも知らぬげに「つなげる」「つなげる」といい、ラジオやテレビでかきひろげ、ちかごろ京都の町なかでさえ「つなげる」といえばいいことを「つなげられる」などと舌のもつれそうなおかしなこと

ばにして舌たるい発音でしゃべっているのを聞くと、ことばは変化してゆくものであり、多くの人が使えば、それが時代のことば、という言語学の通説はわきまえてはいても、釈然とせず、蘇氏の大名にひかれて蘇氏の言葉ぐせまでまねはじめた風潮に、むらむらと鋭いことばを投げてしまった彼女の気持に同情する。

鋭いことばを投げはしても、彼女は蘇氏を尊敬していたので、というより尊敬したからなおさら鋭く衝いたのだろうが、蘇氏の大きさは、身近かな夫の父親が政治的立場の違いから、やっきとなって否定しても、追放しても、人々の心は蘇氏の方に向かい、その反対者が高い地位に居づらくなってゆく、といったところにも、恐らく今の我々には想像もつかぬ実感として迫っており、夫が好んで集めた蘇氏の断簡からでも、痛切にうけとめられていただろう。李清照の若いころの作品にも、こまかに見れば蘇氏の影響らしいものがないではない。夫に死に別れ、戦乱にさまようなかで作ったと察せられる詞には、蘇氏の、いわゆる豪放詞に近い作品があらわれ、そこでは、かつて蘇氏に放ったことばで批評すれば、きずとすべきような語法・韻法をものりこえて、おのれのうたいたい境地をはばかりなくうたっているらしいところが出てきているように感ぜられる。

おのれの批評にさえ立ちどまらずに、おのれの作品を広く深くしてゆくのは、詩人としての当然の歩み。詩人がする批評とはそのような営みをこそさすのであろう。T・S・エリオットが若いときよくいわなかったゲーテを晩年にたたえている。それを変節のようにいう文章を読んだことがあるが、劇詩を幾つか書いたのちにも「ファウスト」の第二部を認めることができなかったとすれば、詩人としても批評家としても失格だったろう。李清照の「詞論」はまだ少しのこっている。それは次回で了れるだろう。

一九八四年七月十八日